



JALT JSL SIG NEWSLETTER

Issue # 15 (3) [serial 37] Fall 2018 (秋号)

JSL 会員の皆様、随分涼しくなってきましたね。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

もうすぐJALT2018の年次国際大会が静岡のグランシップで開催されます。

(<https://jalt.org/ja/conference?translation=a>) JSLでは2018年11月24日(土)の午後4:40から6:10まで(90分間)909号室にて、『日本語学習者のための中級レベルの文法指導』と題してフォーラムを開催します。詳しくはNL3-4頁をご覧ください。また、それに加えて、以下の日程でSIG活動計画等も兼ねてJSLの年次会合(JSL SIG AGM)を開催しますので、皆さまご参加下さい。JSL SIG AGM (JSL SIG 年次会合) 2018年11月24日(土:) 時間: 午後3:45から4:30まで(45分間): 会場: 909号室です。

<http://hosted.jalt.org/jsl/puroguramu.htm>

皆様とお会いできるのを楽しみにしております。



This issue starts with SIG news business reports including Call for papers for JSL SIG journal, information about JALT2018, the 44th Annual International Conference in Shizuoka, and then JALT 2018 JSL SIG Forum previews are introduced, and you can then find the feature article entitled “practice and issues concerning CLIL in Japanese language education” introduced by Akiko Kobayashi.

From Book Review, Masumi Iwashita reviewed a book entitled 『日本語教育に役立つ心理学入門』 lit. “Introduction to psychology useful for Japanese language Education”

From international conferences on Japanese language education, two conferences held in Europe are reported by Yuriko Sunakawa.

Finally, the last page shows SIG membership information.

We would like to express our appreciation to people who contributed their articles to this JSL Newsletter, and kindly supported our editorial team.

The JSL SIG Newsletter editorial team
Megumi Kawate-Mierzejewska,
Maki Hirono, Yo Kawate

IN THIS ISSUE

Greetings	1
SIG News/Business	2
JSL Forum 2018 Preview	3-4
Future Article	5-7
Book Review	7
International Conferences on Japanese language education	8
JSL SIG Membership Information	9

SIG News/Business

▶ Call for Papers :

JALT Journal of Japanese Language Education

JALT Journal of Japanese Language Education Japanese-as-a-second language (JSL) researchers, teachers, and learners are invited to contribute articles, research reports, essays, or book reviews. Please submit the manuscript to us with a 25-word background of the author and Email address. We accept papers related to JSL/JFL in either Japanese or English. Please send your manuscript (MS Word) to < jaltjsl@yahoo.co.jp >.

Please visit

<http://hosted.jalt.org/jsl/PDF/JJLE14.pdf>

p.81 for details.

Submission Deadline: May 31st, 2019.

来年 2019 年の秋に発行される『JALT 日本語教育論集』の原稿を募集しております。興味のある方は、2019 年 3 月 31 日までに上記のメールアドレスまで、原稿をお寄せください。尚ガイドラインは上記の 81 頁とある http にアクセスして下さい。原稿は編集できるように MC ワードで送って下さい。

▶ Forthcoming Conference:

JALT 2018

The 44th JALT Annual International Conference 2018 will be held at Shizuoka Convention & Arts Center (Granship) in Shizuoka on November 23th - 26th in 2018.



Please visit <https://jalt.org/conference> for details.

▶ JALT2018 JSL SIG AGM

It is scheduled for

Day: Saturday, November 24th

Time: 3:45 PM - 4:30 PM (45 minutes)

Room: 909

In this meeting, we will look back our previous activities, discuss plans for future JSL SIG activities, publications, and elect officers for 2019.

▶ JSL SIG Table

A JSL table will also be set to further promote JSL SIG to JALT2018 participants.

▶ JSL SIG Forum2018

It is scheduled for

Day: Saturday, November 24th

Time: 4:40 PM - 6:10 PM (90 minutes)

Room: 909

This forum entitled by “Teaching Intermediate Level Grammar for JSL” has been coordinated by Professor Sayoko Yamashita at Jissen Women's University, and four JSL educators will present this forum. Please read the next page under the section of JALT 2018- JSL SIG Forum Preview for details.



庭先の秋のドウダンと紅葉

JALT 2018

JSL SIG Forum Preview

日本語学習者のための
中級レベルの文法指導Teaching intermediate level grammar
for JSL

- Speaker 1 富倉教子
TOMIKURA, Kyoko
2 桜木ともみ
SAKURAGI, Tomomi
3 小澤伊久美
OZAWA, Ikumi
4 山下早代子
YAMASHITA, Sayoko

「受動態を覚えていますか？」

-Collaborative output tasks を通しての受
動態の習得-

富倉教子
TOMIKURA, Kyoko
早稲田大学
Waseda University

本発表では、日本語中級レベルの学習者がよく間違いを起こす初級文法を一つとりあげ、Collaborative output tasks を通して、その文法の正確性を挙げ、かつ文法項目の更なる理解と定着を図る。Nassaji & Fotos (2011)によると、Collaborative output は二つの観点に影響を受けている。1) Swain の Output hypothesis (1985, 1995)— L2 学習者の習熟度を上げるために、産出が必要であるということ。2) 学ぶことは本質的には社会的であり、言語習得において他者との関わりや協同作業がその習得を成功させる上で重要であるということ(p.103)。さらに協同作業を通して、学習者は新しい知識を自分のものとし、固めることができるとしている(p.107)。またその本のなかで、Collaborative output tasks

によって学習者の正確性が上がったといういくつかの研究も紹介している

参考文献：

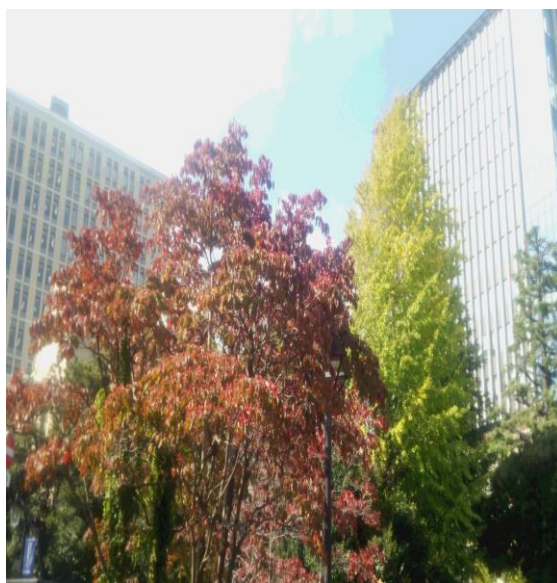
Nassaji, H. & Fotos, S. (2011). *Teaching Grammar in Second Language Classrooms:*

Integrating Form-Focused Instruction in Communicative Context. New York and London: Routledge

Swain, M. (1985). Communicative Competence: Some Roles of Comprehensible Input and Comprehensible Output in Its Development. In S. Gass and C. Madden (Eds.)

Input in Second Language Acquisition (pp. 235-253). Rowley, MA: Newbury House.

Swain, M. (1995). Three Functions of Output in Second Language Learning. In G. Cook and B. Seidlhofer (Eds.), *Principle and Practice in Applied Linguistics: Studies in Honour of H.G. Widdowson* (pp. 125-144). Oxford: Oxford University Press.



東京都内の紅葉：右はイチョウ

複文構造の発達を促す教室活動の検討

桜木ともみ

SAKURAGI, Tomomi

国際基督教大学:

International Christian University

本発表では、名詞修飾構造のインプットから情報を整理しアウトプットにつなげる活動を検討し、中級学習者の複文構造の発達支援について考える。

「買った本を持って電車に乗った彼は、空いている席に座ると早速読み始めた。」といった文に見られるように、名詞修飾節などの複文は情報を補足的に説明したり場面展開を説明したりするために頻繁に使用される。しかし、SOV 語順の日本語の複文構造は主節に前置するため、母語が日本語と類型論的に異なる学習者には難しいと言われる。実際、初級から基本的な語順や文法を学習しても複文構造をうまく運用できない学習者が少なくない。

中級レベルで「動詞 テイル/テイタ」を教えるということ:

習得を促すタスクを考える

小澤伊久美 OZAWA, Ikumi

国際基督教大学

International Christian University

本発表では、日本語中級学習者が習得でつまずきがちな「～ている/ていた」を取り上げ、その習得を進めるタスクを紹介する。第二言語習得研究(SLA)の成果をできるだけ教室指導に反映させようと様々なタスク・ベースの教授法(TBLT)が提唱されている(小柳・峯 2016、小柳・向山 2018、橋本 2018 他)が、Benati and Yamashita (2016)も第二言語習得におけるインプットの重要性を改めて指摘し、文法習得がうまくいくための教室指導としてのタスクのあり方を紹介している。

Benati, A.G., & Yamashita, S. (2016). *Theory, research and pedagogy in learning and teaching Japanese grammar*. London: Palgrave Macmillan.

Hashimoto, Y.(2018). *An analysis of first and second language acquisition stages from a Usage-based Model perspective*. Tokyo: Kazamashobo.

Koyanagi, K., & Mukoyama, Y.(2018). *Universality and individuality in second language acquisition: Learning mechanisms, individual differences, and second language pedagogy*. Tokyo: Kuroshio Publishers.

Koyanagi, K., & Mine, F.(2016). *A cognitive approach to second language acquisition: Grammar development in Japanese and the-effect-of-instruction research*. Tokyo: Kuroshio Publishers.

自然な日本語会話のための終助詞の使用法を指導する

山下早代子 Sayoko Yamashita

実践女子大学

Jissen Women's University

本発表では終助詞に関する先行研究を紹介し、学習者に対してSLA理論を反映させたこれら終助詞の教授法を提案する。初級日本語で「です・ます」形の丁寧体を十分に学んだ学習者は、友人とのカジュアルな会話では非丁寧体で話そうとするようになる。そして「です・ます」を取れば非丁寧になると考え「もう本読んだ(の)?」に対して「読んだ」、「この漢字何?」に対して「リングだ」、「駅まではバスがいい」などの表現でインフォーマルな文体を表そうとする。これらは日本人が聞くと強すぎる、あるいは不自然な印象を持つことが多い。中・上級であっても、非丁寧体を表現する場合に終助詞の「よ」や「ね」をつけて表現を和らげたり丁寧度を表したりすることを認識していない学習者が多い。

Future Article

日本語教育における CLIL の実践と課題 Practice and issues concerning CLIL in Japanese language education

小林明子

Akiko Kobayashi

島根県立大学

The University of Shimane

CLIL とは？

近年、日本語教育において CLIL (クリル) という教授法が取り入れられ始めている。CLIL は、Content and Language Integrated Learning の頭文字を取ったもので、日本語では「内容言語統合型学習」と呼ばれる (池田, 2013)。

CLIL は、外国語 (第二言語) を用いて特定のテーマや教科科目を学ぶことで、内容の理解を促すとともに、語学力を伸ばすことも意図した教授法である。内容と語学を組み合わせることは、イマージョン教育や CBI (Content-Based instruction) など以前から行われており、専門日本語教育、外国人児童・生徒のための教科学習など日本語教育においてもその実践例は多く見られる。そのような意味では CLIL の方法論は新しいものではないが、CLIL の最大の特徴は、以下に述べる「4つのC」という考え方にある (Mehist et al., 2008 ; Coyle et al., 2010 ; 池田, 2013 ; 奥野他, 2018)。

(1) Content (内容)

まず Content (内容) とは、授業で扱うトピックやテーマのことである。CLIL では、「内容」を宣言的知識と手続き的知識とに分けて考える。宣言的知識とは、語彙や文法などのいわゆる言語知識、手続き的知識とは、実際に言語を運用する知識を指す。宣言的知識は「わかる」知識、手続き的知識は「できる」知識とも言われる。例えば、日本語の過去形を文法的に知ることは宣言的知識、過去形を適切に使って話したり書いたりできるのが手続き的知識である。CLIL は、特に、

実社会で使える知識の獲得を目指しているため、授業中の活動を通じて「できる」知識を増やすことが重視される。

(2) Communication (言語知識・使用)

CLIL では授業で学習する言語を以下のような3つの側面から捉える。

① language of learning

(言語知識の学習)

テーマやトピックといった内容を理解し、産出するために必要な語彙、表現、文法などの学習。

② language for learning

(言語スキルの学習)

読解、発表、レポート、ディスカッション、質疑応答などの言語スキルの学習。

③ language through learning

(学習を通じた言語使用)

①と②を組み合わせることで実際に使用し、言語習得やより深い試行を促進する。

CLIL の授業では、これらの言語知識、言語使用を計画的に、バランスよく授業に取り入れることが必要とされる。

(3) Cognition (思考)

CLIL では、授業を通して批判的・論理的思考力の育成を目指す。そのために、文法や語彙の知識の理解や暗記、その応用といった「低次思考力 (LOTS : Lower-Order Thinking Skills)」だけではなく、テーマについて資料を収集して分析、評価してみる、グループでディスカッションして、新しい観点やアイデアを見出すなどの「高次思考力 (HOTS : Higher-Order Thinking Skills)」を要求するような活動を取り入れる。

(4) Community・Culture

(協学・異文化理解)

CLIL では、ペアワークやグループワークなどの協働学習を多く行う。これは多様な人々の意見を聞いたり、経験を共有したりすることによって、視野を広げ、物事を批判的に捉え、より深い思考を促すためである。そのため、ときには教室での協働学習

に加えて、ビジターセッションやフィールドワークなど、教室の枠を超えて異文化に触れる活動を取り入れることも必要となる。

CLIL では、これら「4つのC」を意識的に取り入れることによって、内容と語学の習得だけではなく、深い思考を促すことや他者とともに学ぶ意識・態度の醸成を目指す。

より具体的には、CLIL の特徴的指導法は、以下の10点にまとめられる(池田, 2013)。

(1) 内容学習と語学学習の比重を等しくする (2) オーセンティック素材(新聞、雑誌、ウェブサイトなど)の使用を奨励する (3) 文字だけでなく、数字、図版、音声、映像による情報を与える (4) 様々なレベルの思考力(暗記、理解、応用、分析、評価、創造)を活用する (5) タスクを多く与える (6) 協同学習(ペアワークやグループ活動)を重視する (7) 異文化理解や国際問題の要素を入れる (8) 内容と言語の両面での足場(学習の手助け)を用意する (9) 4技能をバランスよく統合して使う (10) 学習スキルの指導を行う。

教師はこれらの指導法を用いながら、上述した「4つのC」が活性化するように授業を計画・実施していく(日本語教育におけるCLILの理論、教育実践についての詳細は、奥野他, 2018 参照)。

CLIL の実践例

日本語教育におけるCLILの教育実践はいくつか見られるが、ここでは筆者の大学における授業例を紹介する(詳細はKane et al., 2013 参照)

ここで紹介する授業は、日本と韓国の自動車産業について、日韓の大学生が経営学の観点から学んだものである。まず、事前学習として経営学教員の講義を聞いたり、講義のキーワードとなる用語の意味や概念を学んだりした。次に、本やインターネットの資料を読んで内容に関する理解を深め、グループごとにより深く調べてみたいトピックを決定した(Content・Communication)。さらに、工場見学や会社担当者への聞き取り調査を

経て、調査結果をまとめ、発表を行った(Communication・Cognition)。これらの一連の活動は、日韓の大学生の混合グループで実施し(Community)、学生が議論を通して日韓の違いに気づき、新たな視点や考えを得るための機会とした(Cognition・Culture)。

留学生たちが書いた授業後のコメントを「4つのC」の観点から紹介する(以下の記述は原文のママ)。まず「日本語を単純な日常会話でなく社会的テーマを持って討論をしてより一層会話に自信ができた」という記述からは、知的で言語的難易度の高い内容について話すことで、自信が高まった様子が窺える(Content・Communication)。また「色々な考えを統合したことが良かったです。日本の場合と韓国の場合の違い点が面白かったです」といった記述からは、異文化コミュニケーションの楽しさ、日韓の視点の違いに対する気づきが生じていたことが分かる(Cognition・Community・Culture)。

一方で、専門的な内容を理解することの難しさ(Content)や日本人学生とのグループワークにおける齟齬(Community・Culture)についての記述も見られた。この授業は、経営学専門の教員、日本語教育専門の教員の2名で担当し、各自の専門的な立場から指導した。具体的には、専門科目教員は講義や内容に関する質問の回答、調査の視点に関する指導などを担当し、語学教員は日本語指導、異文化理解の視点から日韓混合のグループ活動に際しての助言などを行った。しかし、「4つのC」を十分に活性化させていくためには、各教員がそれぞれの専門的な立場から、より一層の足場(学習の手助け)を準備する必要があることも示された。

CLIL の実践における課題

CLIL がその本領を発揮するためには、教師が「4つのC」をコースデザイン、教材作成、授業実施、評価のすべての段階において意識する必要がある。しかし、これら各

段階における内容と言語の統合の具体的な方法については、未だ研究途上にある (Nikula et al., 2016)。まして、日本語教育における CLIL の教育実践は始まったばかりであり、今後、他分野の知見も取り入れながら、より一層の研究の積み重ねが必要となる。

参考文献

- 池田真 (2013). 「CLIL の原理と指導法」『英語教育』62 (3), pp. 12-14. 大修館書店.
- 奥野由紀子・小林明子・佐藤礼子・元田静・渡部倫子 (2018). 『日本語教師のための CLIL (内容言語統合型学習) 入門』凡人社.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Kane, E. A., Tanaka, Y., & Kobayashi, A. (2013). CLIL: Scaffolding content driven teaching for students of JSL and EFL. *Shimane Journal of Policy Studies*, 25, 127-149.
- Mehisto, P., Marsh, D., & Frigols, M. (2008). *Uncovering CLIL: Content and Language Integrated Learning in Bilingual and Multilingual Education*. Oxford: Macmillan.
- Nikula, T., Dafouz, E., Moore, P., & Smit, U. (2016). *Conceptualising Integration in CLIL and Multilingual Education*. Multilingual Matters.



庭先の南天

Book Review

小林明子・福田倫子・向山陽子・鈴木伸子 (2018). 『日本語教育に役立つ心理学入門』東京：くろしお出版

Reviewed by

Masumi Iwashita 岩下真澄
Kwassui Women's University
活水女子大学

日本語学習層の拡大と多様化が進んだ昨今、日本語教師にとって心理学的な知識は重要な要素の一つといえよう。本書には、現在の教師が知っておくべきことが書かれているといっても過言ではない。本書は大学などで日本語教育を学ぶ学生を視野に執筆された本であるが、現役の日本語教師にも手にしてほしい。ワーキングメモリや適性処遇交互作用といった認知心理学や教育心理学の理論に基づいたものもあれば、心内辞書や第二言語不安といった言語教育における心理的な知識に関するものもある。長年教壇に立っている教師や経験知に依存しすぎているかもしれないと懸念している教師が改めて本書を読むことで、より深い知見と自信を得ることができるであろう。

本書は「第一部 日本語教育と心理学」「第二部 学習するときの心理」「第三部 異文化を理解するときの心理」の三部構成となっている。入門書を意識した読みやすい文体や表現で書かれており、従来の外国語教授法や指導方法との関わり、教育現場での応用などがわかりやすく説明されている。さらに、重要な用語が太字で書かれ、索引と対応しているため、日本語教育能力検定試験や大学院進学のための試験対策にも向いている。

欲を言えば、選択的注意やジョハリの窓などにも触れてもらいたかった。入門書ということなので、今後、基礎編・発展編として学習心理学や発達心理学といった他の心理学的知識と日本語教育（言語教育）の関連書籍が出てくることを期待したい。

International conferences on Japanese Language Education

Reported by

砂川有里子

筑波大学名誉教授

Yuriko Sunakawa

Professor Emerita, University of Tsukuba

.....
去る9月6日にクロアチアのユライ
ドブリラ大学プーラ (Juraj Dobrila
University of Pula) にて国際シンポジウム
が開催され、続く9月7日～8日に同大学
で「日本語教育連絡会議」が開催された。
9月6日の国際シンポジウム「新世代の日本
語学習」は、2015年に同大学文学部が開設
した日本語学科で初めての卒業生が誕生し
たことを記念して行われたもので、ヨーロッ
パや日本各地から44名が参加し、三つの基
調講演 (才田いずみ「雑談を用いた日本語
学習」、仁科喜久子「科学技術日本語教授法
のこれまでとこれから」、佐藤勢紀子「論文
執筆方法」) の他、同大学の卒業生とヨーロ
ッパや日本の研究者らによる日本語学と
日本文学に関する17件の研究発表が行われ
た。また、夕方からは「日本語教育連絡
会議」の参加者も対象としたワークショップ
「日本語教育に役立つコーパスの使い方」
(砂川有里子・黒沢晶子・根元佐和子)
が行われた。

9月7日～8日の「日本語教育連絡会議」
は1988年にクロアチアのドブロブニクで1
回目の会議が開催されて以来、東欧を中心と
するヨーロッパ各地で毎年開催されており、
本年は31回目に当たる。発足当初は日本か
らの情報が入りにくい東欧とその周辺地域
の日本語教師が集い、情報交換と勉強会を行
うことを目的とするものであったが、現在で
は東欧以外のヨーロッパや日本からも参加

者を得て学会風の研究発表が行われ、毎年
論文集も刊行されている
(<http://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun.html>)。比較的少人数の会議で、分科
会を設けず、すべての参加者が同じ研究発
表を聞き、自由な雰囲気での討論が行える
ところに特色がある。今年はクロアチアの他、
スロベニア、セルビア、ハンガリー、ドイ
ツ、ベルギー、フランス、ラトビア、リト
アニア、日本から46名の参加があり、日本
語、日本事情、日本語教育に関する研究、
また、継承日本語教育、大学での日本語教
育の実践報告、関係諸機関の機関報告など、
多彩な内容に関する30件の発表が行われ
た。

どちらの会議でも日本語学科の学生ア
シスタント4名による献身的な働きぶりが
印象的だった。また、8日の午後は、アド
リア海沿岸の漁港ロヴィニへのツアーが企
画され、迷路のような町並みの散策と新鮮
な魚料理を楽しんだ。



「日本語教育連絡会議 2018」

会議参加者集合写真

※クロアチアは、旧ユーゴスラビアから独立
した共和国で、バルカン半島にある。

JSL SIG Membership Information

日本語教育研究部会

日本語教育研究部会 (JSL SIG) は、第二言語・外国語としての日本語指導・日本語学習・日本語教育研究の向上を目指し、指導・学習・研究のための資料や情報を提供しています。更に、専門家の育成の為に外国語教育における日本語教授法や言語学 (心理・社会言語学なども含む) の研究推進にも力をいれています。日本語の指導者・学習者・研究者の積極的なご参加を歓迎致します。

▶ 日本語教育研究部会メンバー募集

本部会 JSL SIG は現在 45 名ほどの会員がありますが、会員数を増やし更にネットワークを広げるべく、常時会員を募集しています。皆様の同僚やお知り合いなどにも、是非ともご周知下さい。

▶ 会員のメリット :

1. 論文集『JALT 日本語教育論集』に投稿できる (2 年に 1 回発行、査読あり)
2. 定期的にニュースレターがだされる
3. ニュースレターに論文や学会レポート、日本語の教え方・学び方、その他会員の学会発表・研究テーマ・教授経験など、紹介したい記事を投稿できる
4. JALT や PanSIG の JSL SIG フォーラムに、発表者として参加できる (フォーラムの企画に興味のある方は jsl@jalt.org まで)
5. 入会方法は、JALT ホームページをご覧ください。 <http://jalt.org/main/membership>

Urban Edge Bldg 5F, 1-37-9 Taito,
Taito-ku, Tokyo, 110-0016, JAPAN
Tel: 03-3837-1630 Fax: 03-3837-1631
<http://jalt.org/>

JSL SIG Mission Statement

The mission of the Japanese as a Second Language Special Interest Group (JSL SIG) of the Japan Association for Language Teaching (JALT) is to serve as a resource for promoting JSL/JFL teaching, learning and research. We welcome JSL/ JFL teachers, learners, and researchers to join and take an active role in our SIG.

JSL SIG Membership

The JSL SIG currently has around 45 members. To expand our network and share JSL information more dynamically, invite your colleagues and friends to join!

Benefits of being a member : Be able to

1. Contribute a paper to the peer-reviewed *JALT Journal of Japanese Language Education*, which is published bi-annually.
2. Receive SIG newsletters a few times a year.
3. Contribute articles, conference reports, teaching ideas, students' essays, call for papers, etc. to the SIG newsletter.
4. Participate the JSL forums as a presenter at the PanSIG and/or the JALT annual conference (contact jsl@jalt.org)
5. Please refer to the JALT membership categories and fees on the JALT homepage. <http://jalt.org/main/membership>

